

疊音・疊語の一研究

——特に Reduplicatio suffixa につて——

安藤 正次

疊音といふのは、同種の音または音節の反復重加をいひ、疊語といふのは、同種の語の反復重加をいふのであるが、これらは、造語上の、もしくは語法上の現象として、多くの語族の言語に認められるものである。國語における「かかぐ」(掲)、「たたむ」(疊)の如きは疊音の例であり、「ひとびと」(人々)、「もろもろ」(諸々)の如きは疊語の例である。いまこの種のものが、言語を異にしたがつて、いかなる状態においてあらはれるか、わが國語においては、疊音疊語がいかにあらはれてゐるかを考察しようとおもふが、この問題は、その範圍が非常に廣汎にわたり、その性質がまことに複雑をきはめてゐるので、その詳細は、これを他日に譲り、こゝには、たゞ一二の點だけに

ついで、わたくしの考察の結果を述べることにする。

われわれは、われわれの音聲をいろいろに結びつけた言語を用ゐて、意思表現の用に供してゐるが、音聲のいろいろの結びつきから成る言葉のうちには、同じやうな音の結合の反復されてゐるものがある。これは、疊音といはれる種類のものであるが、疊音から出来てゐる言語には、寫聲的のものが多い。「かたかた」「がたがた」「ことごと」「ことごと」「さくさく」「ざくざく」のやうな自然音的のものもあれば、「くたくた」「ぐだぐだ」「はらはら」「ばらばら」のやうな模擬音的のものもある。さらに眼を轉すれば、兒童語の「とと」「父父」「かか」「母母」「うまうま」「わんわん」の如きものがあり、また「ささ」「笹」「つつ」「筒」「しし」「空」の類がある。かういふ風なものは、いづれの國語にもその例を見出すことが出来るのであるが、これらは要するに、造語の上に疊音の用ゐられた例と見るべきものである。Wundt もこの種の疊音 Lautwiederholung を語詞構成の原始的の形式と見てゐる (Wundt, *Volkerpsychologie*, I. Die Sprache, I. Theil S. 628)。しかして、この種の疊音と語の反復すなはち疊語との隔りは、わづかに一步である。Wundt もこの二つのものは同じものと見てよいといつてゐる (Wundt, *op. cit.*)。「山々」「ロ々」「しばしば」の如き疊語の類例は、多くの國語にめづらしくないのであるが、疊語における語の反復には、完全に語全體をくり返すものと、語の一部分だけを重加するに過ぎないものとがある。Brugmann は Grundriss のうちで、前者を

Reduplicatio integra 後者を Reduplicatio mutila と名づけ、Wundt は前者を特に Geminatio とよび、後者だけを Reduplikation とよんでゐる。しかるにこの Reduplicatio mutila のうちには skr. rí-rí-éa, Gr. λέ-λόιπ-ε, Lat. tu-tud-it の ri, λέ, tu のやうなものがあり、なほこの類には梵語の dar-dara に對する dar-d-ú の如きギリシヤ語の ποποπος に對する ποπο-ε の如きラテン語の sur-gulio に對する sur-g-es の如きものがある。Brugmann は前者を Reduplicatio praefixa 後者を Reduplicatio suffixa と名づけてゐるが、これらもまた一種の疊音と見られる。しかしこの種の疊音は語詞構成上のもではなく、全く語法的のものである。わたくしは本篇においては、特にこの Reduplicatio suffixa についてその證例を國語のうちにもとめ、いさゝかこれが考察を試みようと思ふ。

二

疊音・疊語が、どうして言語の上にあらはれて來るかについては種々の説明がつくが、まづ第一に、それは印象の反復がその印象を強める結果になるといふことと關係をもつ。繰返される周囲の對象が話者に強い印象を與へ、その強い印象は、音の反復語の反復によつて表現される。すなはち疊音・疊語の表現は、本來、強意的のものなのである。國語にあつても、ほとほと(殆ど)

「うとうとし」(疎)「にくにくし」(憎)の類において、それぞれの成分の反復が、もとの意味を非常に強めてゐる。もつとも疊音疊語が、かならずしも強意的とは思はれない場合もある。ポリネシア語系の Samoa 語で「赤」を *nunū*、「白」を *sinasina*、「黄いろ」を *sengasenga* とし、「Tonga 語で「黒」を *ululi* とし、「Fahiti 語で「白」を *teatea* とし、ふやうな例も少くないが、これらについてもすでに先輩の説があつて、自然人にあつては、色彩の感覚がことに鋭敏であるから感情に及ぼせる色彩の強い影響がかういふ表現の形式をとつてあらはれて來るのであらうといふ。現に同じ地域において同様な反復語形が、形容詞の比較における最上級の意味をあらはすに用ゐられることがある。Samoa 語で、*tele* は「大きい」をあらはすが、*teletele* となると、「非常に大きく」といふ意味になり、Maori 語では *riki* は「小さい」をあらはすが、*rikiriki* となると、「非常に小さく」といふ意味となる (Hans Jensen, *Der steigende Vergleich und sein sprachlicher Ausdruck*. Indg. Forsch. 1934, Wundt, op. cit. S. 627f.)。かういふ例を取合せて考へると上記の語の如きは、表面には強めの意味があらはれてはゐないが、本來はさういふ性質のものであることが知られて來る。インドゼルマン語族にあつても、疊音疊語はいろいろの場合に認められてゐるが、梵語の動詞の三人稱複數における *Intensivum* とよばれる疊音法の如きは、ことに注意に値するものである。

疊音や疊語は、また、感動詞などの上にもよくあらはれて来る。「おやおや」「まあまあ」の如きものがそれであるが、これらもまた、その感情の強さが反復となつてあらはれてゐるのである。しかるに、疊音疊語には、また、児童語といふべき「うまうま」にぎにぎの如きものがあり、これに類するものには、小豆を「あかあか」「浅漬を「あさあさ」といふ類の女房詞があるが、この類の女房詞は、ものをやさしく無邪氣にいふのを主としてゐる關係上、児童語と氣脈の相通するものがあるのであらう。インド・ゲルマン語族の言語などにおいても、感動詞の反復は、廣範圍にわたつて用ゐられてゐるものであり、papa, mama の如き、*S*はゆる *K*osewörter や動物名などに疊音疊語の用ゐられてゐることも多し(H. Hirt, *Doppelung Zusammensetzung Verbum*. Idg. Gram. IV. 1928.)。按ふに、児童語や女房詞にこの種のもののあるのは、本來は、児童語において、周圍のものが、児童にはつきりした印象を與へるために反復を用ゐると、児童の言語發達の初期には、單音節のものが多く用ゐられるために、おのづからこれを反復することになるのと、この種のもものが、児童語彙のうち、重きをなすに至つたものであらう。

次にまた、疊音疊語が縮小義をあらはす用をなすことがある。インドネシア語族において、Makassar 語で *balla* は「家」で、*balla-balla* は「小家」、Dayak 語で、*karahak* は「残り」、*h*はしたなどの義、*baharahak* と *S*へは「少しの残り」、*ほんのはした*と *S*ふほどの義、Bugi 語では、*bulu* が「山」、*bulu-*

bulu が「小山」である (Fr. Müller, Grundriss. II. 2. S. 103, Royen, Nominalklassifikation. S. 460, R. Brandstetter の著書など)。かういふ縮小義を示すものは、南方語にばかりでなく、北方語にも見出される。一例としてヤクト語の場合をあげれば、*basach beseya* (小さなナイフ) *knööl knölyä* (小さな湖) のやうな疊語がしきりに用ゐられ、人名などでも子供の場合には、その名を重ねていふ風がある (Böhlingk, Jakutische Grammatik. Petersburg, 1851. §780.)。

第三に、疊音や疊語が、事物の複數動作や状態の繼續・反復を示すことがあるが、これは、古今東西の言語において、めづらしくもないことである。國語の「*くく*」(家々)、「*やまやま*」(山々)、「*く*」(國々)、「*てらでら*」(寺々)のやうな名詞をかさねた例はいふまでもなく、「ありありて」「行きて」「いひいひ」「いふいふ」の如き動詞の疊語「ことごと」「しばしば」「やうやう」のやうな副詞、さては「つつ」の如き助動詞の疊語「*まま*」の如き、疊語で品詞所屬が問題となつてゐるのなどは、みなこの種類として數へられるやうである。臺灣の生蕃語にも、この類が少くない。Ami 語で、物を刻むことを *mi-tsarsar* といひ、特に菜や煙草を刻むことを *hi-türüs* といひ、打つといふ動作を互に反復する意味の打合ふことを *ma-pa-paro* もしくは *moro-paro* といひ、何か事柄の繼續することを *ma-ka-kavi-kavit* といひ、傳へるといふことを *pa-tsa-tsaro-t arök* といふやうな類はすなはちこれである。終の二例の如きは、疊音・疊語の二重奏ともいふべきものであるが、かうい

ふ風に二回以上疊加されるやうなこともあへて生蕃語に限られたものではないのである。

第四に、疊音疊語によつて、比較の意味のいひあらはされるものがあるが、それは、意味を強めていひあらはす場合のもの、さらに一步を進めたもので、前に例示した Samoa 語の *teletele*, Maori 語の *ikiriki* の如きその類である。

以上の如く、疊音疊語は、同じ音、同じ語の反復重加によつて、いろいろの語法上意義上のいひわけをなすものであるが、さてわたくしの問題としてゐる *Reduplicatio suffixa* は語法上意義上いかなるものであるかといふに、語法的には一種の接尾辭もしくは造語辭であるが、意義的には、上述の各種の場合のいづれをも表現し得るものなのである。

三

疊音疊語をその成立ちから分けていへば、疊音には、語の最初の音節をくりかへすもの、最初の子音をくりかへすもの、中の音節もしくは子音をくりかへすもの、終の音節もしくは子音をくりかへすものがあるが、それらの場合に、その音節もしくは子音が全然もとのまゝであることがあり、また幾分かの音韻的變化をうけることがある。疊語には、もとより語の反復に過ぎないが、語の全體をそのままくりかへす場合と、その一部において音韻的變改をうけた語の

くりかへされる場合との二つがある。これらの各種についての説明は省略することにするが彼の Reduplicatio suffixa なるものは語の終の音節もしくは子音をくりかへすといふ種類に属するものなのである。わたくしは假にこれを接尾疊音と名づけることにする。

接尾疊音については前にインド・ゼルマン語の一二の例を挙げておいたが、いま一層これを明らかにするために、なほ二三の例をあげれば、アフリカのハミテック語族に属する Biliu 語で「結ぶを意味する gabel から「發達するを意味する gabial がまた Chamir 語の erk (齒單數)から erkuk (齒複數)が ig (伯父もしくは叔父單數)から igge (伯叔父複數)が, Irob-Saho 語の iko (雞單數)から ikok (雞複數)が形づくられてをるのも、明らかに接尾疊音の法によつたものである(C. Meinhof, Die Sprachen der Hamiten, Hamburg, 1912)」。ドラーヴィダ語族に属する Tamil 語にもつては、語根の最後の子音を反復して種々の語法上の表現の用に供することが、すこぶる顯著である。すなはち Tamil 語では、語根の最後の子音が次のやうな場合に重ねられる。(一)名詞を形容詞に變じて、それが他の名詞を修飾することを示し、或は名詞を領格にするために。 māḍu (牡牛)が māḍu-(+)kol (牡牛の皮)となる。(二)自動詞或は中間動詞を他動詞とするために。 oḍu (走る)から oḍḍu (驅る)が出来る。(三)preteriteをつくるために。 tag-u (to be fit)が tak-a (that was fit)となる。(四)動詞の基本形から轉成名詞をつくるために。 erud-u (書く)から erutt-u (a letter)

が出来る。これらの場合に、Tami語では、有聲子音が無聲子音となるのが原則となつてゐる。
(R. Caldwell, A Comparative Grammar of the Dravidian. London, 1913. p. 204.)

國語におけるこの種のものとしては、わたくしは、「いかが」「いとど」「しとど」「うたた」「ことと」の類をあげたいと考へる。

「いかが」「いとど」「しとど」は、「いづれも」「いかに」「いとど」の最後の音節が疊加され、無聲子音の有聲子音となつたものと考へられる。これらの「いかに」「いとど」が獨立の形で用ゐられることがなくと、これを根幹の語と見て差支ないことは、すでに類似の場合において Winitz の論じてゐるところでもあるが、それを引くまでもなく、「いかに」は萬葉集卷八(一五〇七)に「伊加登伊可等有吾屋前爾同卷五(八七五)に「伊加婆加利故保斯苦阿利家武」などの例が古くもあるによつて、自由につかはれるものであることがわかるし、舊説のやうに、「いかが」を「いかに」かの音便、いかながの約と見なければならぬ理由を見出し得ない。「いとど」の「いとど」が獨立の語としていろいろに用ゐられてゐることは、別にいふまでもないのであつて、この「いとど」が重なつても、有聲音となつたとすれば、それは「いとど」の約と見るよりもはるかに適當な解釋であらう。「いとど」が形容詞となつて志久活用にはたらくことは、「初々し」「うべうべし」のやうに、疊語より成る形容詞がすべて志久活用に屬してゐる點から見ても、「いとどし」の「ど」が疊音的のものであることを暗示

してゐるものなのであらう。「しとどもしとしとの約ではなく、「しと」の「と」の疊加されたものであらう。「うたた」こととの類は接尾疊音の子音の有聲化されない場合のものであるが、このうち「うたた」の「うた」は古事記に見えてゐる建内宿禰の歌に「許能美岐能美岐能阿夜邇宇多陀怒斯」（日本書紀には「許能彌企能阿椰珥于多娜濃芝」とある）宇多であつて、その終の音節がくりかへされて「うたた」轉となり、その音節の母音の變化したものが「うたて」といふ語となり、意義の分化もこれに伴ふやうになつたのであらう。

次に「こと」についても、従來諸種の解釋が下されてゐるが、わたくしは、この「こと」は「ことごと（悉盡）の「こと」と同じであり、ことごとの場合「こと」の完全疊語、「こと」の場合「不完全疊語」であつて、「こと」との最後の「と」は「こと」の疊音であり接尾疊音といふべきものであると考へる。

源氏物語の桐壺の巻に「とりたてゝはかばかしき御うしろみなければ、こととある時は、なほよりどころなく心ぼそけなり。」とある「ことと」は、特別の、何か異なつたことといふほどの義であるが、「こと」は「異」であり「殊」である。「ことごと」は、この「こと」の疊語であるが、この疊語が、異なるもの多數を意味してゐることは、ちやうど「山々」「人々」「夜々」が、多くの山、無數の人、夜はいつでもを示してゐるやうなもので、異なるものの集りは結局は全體を意味することになり、「ことごと」はスペテスツカリの意に用ゐられるやうになつたのである。同じ物語の帚木の巻に「ことと

明うなれば障子口まで送りし給ふ。」野分の卷に「ことと馴れ馴れしきにこそあめれ。」などあるのは、マツタクといふほどに解せられる。これらの語意については、旁證をあげてなほいふべきことも多いが今はそれに觸れない。

以上、わたくしは、疊音疊語の一般的考察から特殊の問題に入り、わが國語にも接尾疊音といふべきもの存することの一端を述べたに止まる。他日、さらに詳説を試みることがあらう。

(昭和十年二月二十七日稿)